BMW Group
Japan
Corporate Communications

2011 年 9 月 22 日

MINI が BMW Group Studio で 9 名の日本人建築家の作品を展示

- **小さくて多機能な建造物を創造する革新的なプロジェクト、「ライディング・プロジェクト」とのコラボレーションを実現**
- **建築家 原広司氏デザインによる MINI Crossover のためのガレージも公開**

ビー・エム・ダブリュー株式会社（代表取締役社長：ローランド・クルーガー）のプレミアム・コンパクトカー・ブランド、MINI(ミニ)はオーストリアのライディング村を舞台に巨大都市の空間と田舎の隠れ家のイメージを融合させ、小さくても多機能な建造物を創造しようとするプロジェクト、「ライディング・プロジェクト」とコラボレーションし、このプロジェクトに参加する日本人建築家 9 名がデザインした構造物のデザインコンセプトを 9 月 23 日（金）から 10 月 3 日（月）までの期間、BMW Group Studio に展示する。

大都市の活気あるライフスタイルと、のどかな田園地方の雰囲気を融合させ、多機能なミクロ構造物のコンセプトを表現するために、ライディング・プロジェクトの建築家は「クロスオーバー」という概念を、それぞれに解釈した。この度、その最新の建築コンセプトが、2011 年 9 月 25 日(日)～10 月 1 日(土)まで東京で行われる第 24 回世界建築会議(UIA)の開催を機に、BMW Group Studio で初公開される。特別展示として、京都駅や札幌ドームの設計で知られる原 広司氏がデザインした、MINI の新型車「MINI Crossover」のための、持ち運び可能なツインタイプのガレージも公開される予定である。

小さくても大人 4 人が快適に乗れる革新的なコンセプトの車両として誕生し、現在でもその基本的な考えを受け継いだ車である MINI は、小さくても建築物として様々な可能性や機能を持たせたコンセプトを表現しようとするライディング・プロジェクトの試みに賛同し、この度のコラボレーションを決定した。また、MINI としては初めて 4 枚のドアを採用し、4 輪駆動をオプションとして設定した MINI Crossover は、大都市でのライフスタタイルだけではなく、サーフィンやスノーボードなど郊外でのライフスタイルもアクティブも楽しめる車で、まさに都会の世界感と郊外の世界感を「クロスオーバー」させた新しいコンセプトのモデルである。まさにこの度の展示コンセプトである「クロスオーバー」とも合致したモデルである。

展示内容： 日本の建築家による”クロスオーバー”する建物の模型や図面の展示

展示期間： 2011 年 9 月 23 日(金)～10 月 3 日(月)

時間： (平日) 11:00 – 19:00
(土・日・祝日) 11:00 – 18:00

特別展示： 原広司氏が MINI の新型車「MINI Crossover」のためにデザインした、持ち運び可能なツインガレージ

参加建築家： 原広司、伊東豊雄、藤森照信、大野秀敏、隅研吾、
SANAA(妹島和世 + 西沢立衛)、山下保博、手塚貴晴 + 手塚由比

キュレーター： ローランド・ハーゲンバーグ(協力：森田伸子、阪部惠子)

後援： MINI Japan 第 24 回世界建築会議と同時開催。
UIA2011 東京大会 日本組織委員会(JOB)

協力: オーストリア大使館 / オーストリア文化フォーラム東京

ライディング・プロジェクトについて

ウィーンの南80kmに位置するライディング村。人口わずか850人のこの村は、作曲家フランツ・リスト生誕の地として知られている。フランツ・リストは今年、生誕200年。その業績を称え、生家の隣に600席のモダンなコンサート・ホールが建設された。
ライディング村は、東西ヨーロッパの中間に位置している。この村から、かつてオーストリアとハンガリーを分断していた壁まで、車でわずか15分。1683年まで、ライディングやウィーンに進攻していたオスマン帝国軍が、ヨーロッパ征服を断念したのがその地である。またローマ帝国の時代にさかのぼれば、ローマ人も自国を守るための前哨地をこの地に置いていた（今もライディング村では、かつてローマとスカンジナビアを結んでいた琥珀の交易路“アンバー・ロード”の一部を見ることができる）。この歴史的、地政学的背景のもと、9人の日本人建築家が思考実験を行ない、小さく、多機能な建物を創造するための飛翔の場として、ライディング村を選んだ（これがライディング・プロジェクトです）。その建物は将来、世界中から訪れる音楽家や芸術家に使用される予定である。

東京駅の隣のBMW Group StudioでMINI Japanとのコラボレーションの一環として展示される模型や図面の一例として、藤森照信の“ストーク・ハウス―コウノトリ庵”がある。4名が宿泊可能なこの施設は、毎夏アフリカからライディング村に渡ってきて巣を作るコウノトリにちなみ、屋根にコウノトリの巣を配している（ストーク・ハウスは2011年10月に建築開始予定）。藤森照信はこれまで、元総理大臣の細川護熙氏の工房も設計している。また、伊東豊雄（TOD’S表参道ビル、台湾の台中メトロポリタン・オペラハウスを設計）による、周囲の丘陵地帯のワイナリー内に建てられる、しっかりしたキューブ状の建物の計画も展示されている。

原広司（京都駅、梅田スカイビル、札幌ドームを設計）の“ライディング・キューブ”は、宿泊施設として、また同時に公開パフォーマンスを行う、ごく小さな舞台としても構想されている。隈研吾（最近ではスペイン・グラナダのパフォーミング・アーツ・センターを設計）は、オーストリアLuccon社のユルゲン・フライが開発した、光を透過するコンクリートを使った設計を試みている。

オーストリア人のライター・写真家のローランド・ハーゲンバーグが企画したライディング・プロジェクトは、巨大都市の空間と田舎の隠れ家のクロスオーバーを象徴する、マイクロ・デザイン住宅を集めたものである。本プロジェクトの建築物は、相互接続する世界における機動性、変化、多機能性に取り組んでいる。

また一部の建築家は、最近日本で起きた大災害を教訓にしたコンセプトも提案した。オーストリアのライディング村のために考えられた住居が、たとえば地球の反対側の、日本の東北地方でも役立つというコンセプトである――このコンセプトに基づき、山下保博はトレーラー(“モバイル・スマイル”)を、大野秀敏はサービスや物品の効率的な供給システムをデザインした。

原　広司氏デザインのガレージ:
本展覧会の特別展示が、原広司によるMINI Crossoverのための、持ち運び可能なツインタイプのガレージである。“キャップ＆キャンプ”と呼ばれるこのガレージの片側にはMINI Crossoverを収容、もう片側にはドライバーや同乗者が宿泊できる。ガレージの名称は設計概念を象徴しており、ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーの思想にちなんだ言葉遊びある。ハイデッガーの著書『存在と時間』は、時間の流動性と存在の意味を分析した作品である。原広司の構想によれば、“キャップ＆キャンプ”のカラーとパターンはカスタマイズ可能で、都会とアウトドアを行き来する機動性を楽しむ、MINI Crossoverのドライバーそれぞれの好みに合わせられるようになっている。

キュレーター:
ローランド・ハーゲンバーグはライター、写真家、フィルムメーカー。オーストリアのウィーンに生まれ、現在は東京在住。『Vogue』、『Architectural Digest』などに記事や写真を寄稿。ハーゲンバーグの日本人建築家についての著作は、広く英語、日本語、中国語で出版されている。2010年から、作曲家フランツ・リスト生誕の地、オーストリアのライディングに日本人建築家を招き、マイクロウス・プロジェクトを実施中。近著に『なりたいのは建築家――24 ARCHITECTS IN JAPAN』(柏書房、2011年6月発行)。
www.hagenberg.com

この件に関する読者および視聴者からのお問い合わせ先は、
MINI カスタマー・サポート : フリーダイヤル 0120－56－5532 をご掲載ください。
受付時間 : 24 時間　年中無休
MINI インターネットウェブサイト :　http://www.mini.jp

この件に関する報道関係者のお問い合わせは:
BMW Japan Corp.広報室:03-6259-8026(製品広報)までご連絡ください。